

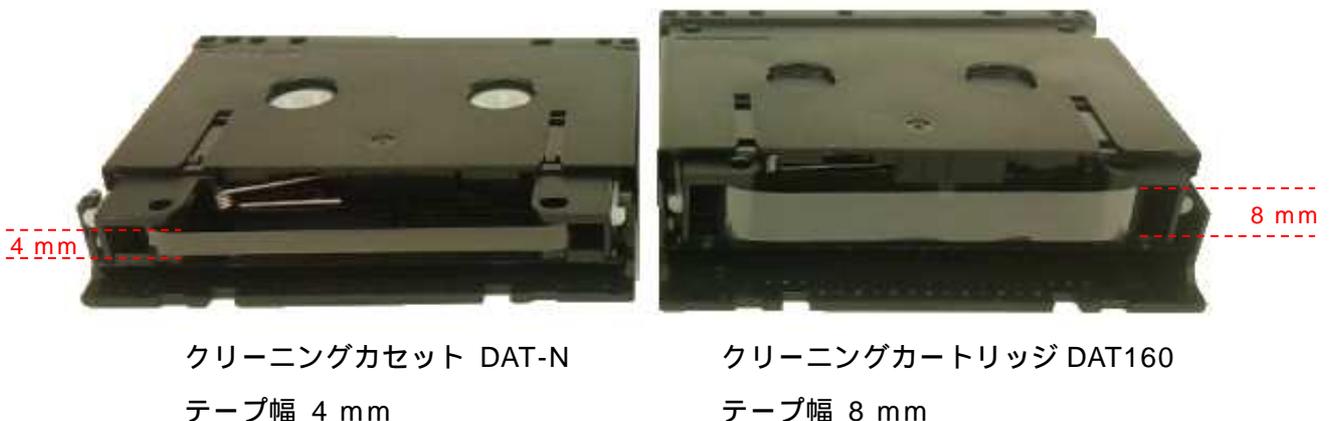
～「バックアップ失敗！ データが復元できない！」といったトラブルを防止するために～

DAT 装置は、クリーニングカセットを使用し、定期的に清掃してください。長期間 DAT 装置を清掃しないと、磁気ヘッドがほこりやゴミで汚れてきます。これにより、データの読み書きが正常に行われず、データカセットの寿命が短くなる、テープ表面にキズが付き使用できなくなる、汚れがこびりつき装置が故障する、などのトラブルが起こり、大切なバックアップ運用に支障をきたす場合があります。正しくメンテナンスを実施することで、媒体エラーによるバックアップや復元の失敗リスクを減らすことができますので、是非ともご一読ください。

装置に対応したクリーニング媒体を使いましょう

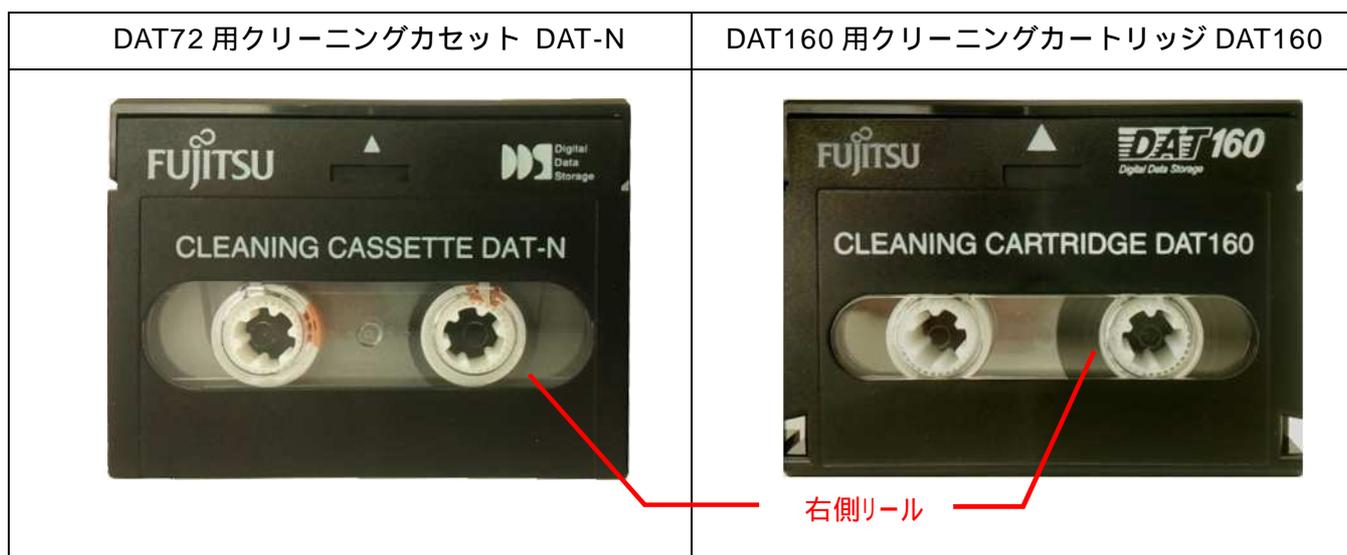
装置種類	クリーニング媒体	クリーニング媒体の写真	
DAT 装置 ・ DAT 72 ・ DDS 4 ・ DDS 3	富士通 クリーニングカセット DAT-N 商品番号 0121170		
DAT 装置 ・ DAT 160	富士通 クリーニングカートリッジ DAT160 商品番号 0121240		

例えば、DAT72 用クリーニングカセット DAT-N で DAT160 装置のクリーニングは行われません。一見媒体は似ていますが、以下のようにテープの幅が異なっているため、クリーニングが行えないように設計されています。



クリーニング媒体には寿命があります

DAT 装置のクリーニング媒体の場合、寿命を目視で確認できます。左側リールのテープが無くなって、すべてのテープが右側リールに巻かれた状態のものは寿命に達しています。再利用はできませんのですぐに交換してください。



以下の場合にも新しいクリーニング媒体に交換してください。

- ・クリーニング媒体を挿入し、1分経過しても排出されない場合
- ・クリーニング後にもクリーニングランプの点滅が止まらない場合

クリーニング媒体の使用回数には限度があります

DAT160 装置はヘッドの汚れ具合により自動的にクリーニング回数を調整しています。そのため、実際には通常使用で約 30 回、汚れ具合によっては 30 回より少なくなる場合があります。

クリーニング媒体のジャケットにチェックシートが用意されています。シートを活用して回数を管理してください。回数が 30 回に近づいたら、クリーニング媒体の寿命を確認してください。寿命が近づいたら早めに新しいクリーニング媒体をお求めください。

クリーニングを行う毎に下の欄にチェック下さい。
Use this section for keeping a record of cleaning operations.

1/6	1/13	1/20	1/27	2/3	2/10	2/17	2/24		
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

媒体を装置に入れたままにすると早期に寿命に至らせることがあります**・未使用時、READY 状態にしない**

媒体を挿入すると READY 状態になります。READY 状態のときは、装置内部でカートリッジからテープが外に出ています。この状態で放置すると、データ記録面に汚れが付着して、ヘッドを汚したり傷つけたりしてしまいます。

・イジェクトしたまま放置しない

バックアップ処理を CL (プログラム) により自動化している場合、以下の注意が必要です。

SAVE 系コマンド (退避完了) UNLDMT EJECT-@YES コマンド (媒体自動排出)

この状態で放置していると、装置の前面ベゼルが開いた状態となり、ホコリによるヘッドの汚れリスクが高まってしまいます。

バックアップが完了した時は、速やかに媒体を取りだし、ケースに入れて保管してください。

自動運転や夜間バッチなどでオペレータが介入できないときは

そんな時はハーフイジェクト運用をお薦めします。以下に運用例を示します。

オペレーション	補足情報
媒体をセットする	媒体をセットしたらすぐにハーフイジェクトにします。プロフィールのメニューに作成しておくくと便利です。
UNLDMT EJECT-@NO を実行し、ハーフイジェクト状態にする	
日常業務を実行	
夜間バッチにてバックアップを開始	ロード状態は、バックアップの時のみにします。 バックアップ用 CL に組み込みます。
LOADMT コマンドを実行し、ロード状態にする	
バックアップを実行する	
バックアップ終了後、UNLDMT EJECT-@NO を実行する	READY (テープが出ている) 状態でシステム電源 off/on を絶対にしないでください。媒体故障の原因となります。
システム終了処理で電源を切断する	
自動電源でシステムの電源を投入する	
システム始動ジョブを実行	ハーフイジェクト状態でも、PRIMERGY 6000 本体が電源投入されると、装置は READY 状態になってしまいます。そのため、IPL 後すぐにハーフイジェクトにする必要があります。
システム始動ジョブで UNLDMT EJECT-@NO を実行する	
媒体を取り出すため UNLDMT EJECT-@YES を実行する	媒体排出はコマンド実行を推奨します。 メニューに作成しておくくと便利です。

このような場所では使用 / 保管しないでください

D A T 装置は以下のような場所を避け、よりホコリの少ない環境に設置してください。

直射日光の当たる場所

発熱器具のそば

衝撃、振動の加わる場所

湿気、ほこりの多い場所

室内の温度が極端に高温または低温の場所

温度変化が激しい場所

設置後、数ヶ月で装置周囲にホコリが堆積するような場合には設置場所を見直してください。



装置前面の隙間にホコリが付着している例

当資料をご一読いただき、装置や媒体の取扱方法を見直していただくことでバックアップ関連のトラブルの改善につながれば幸いです